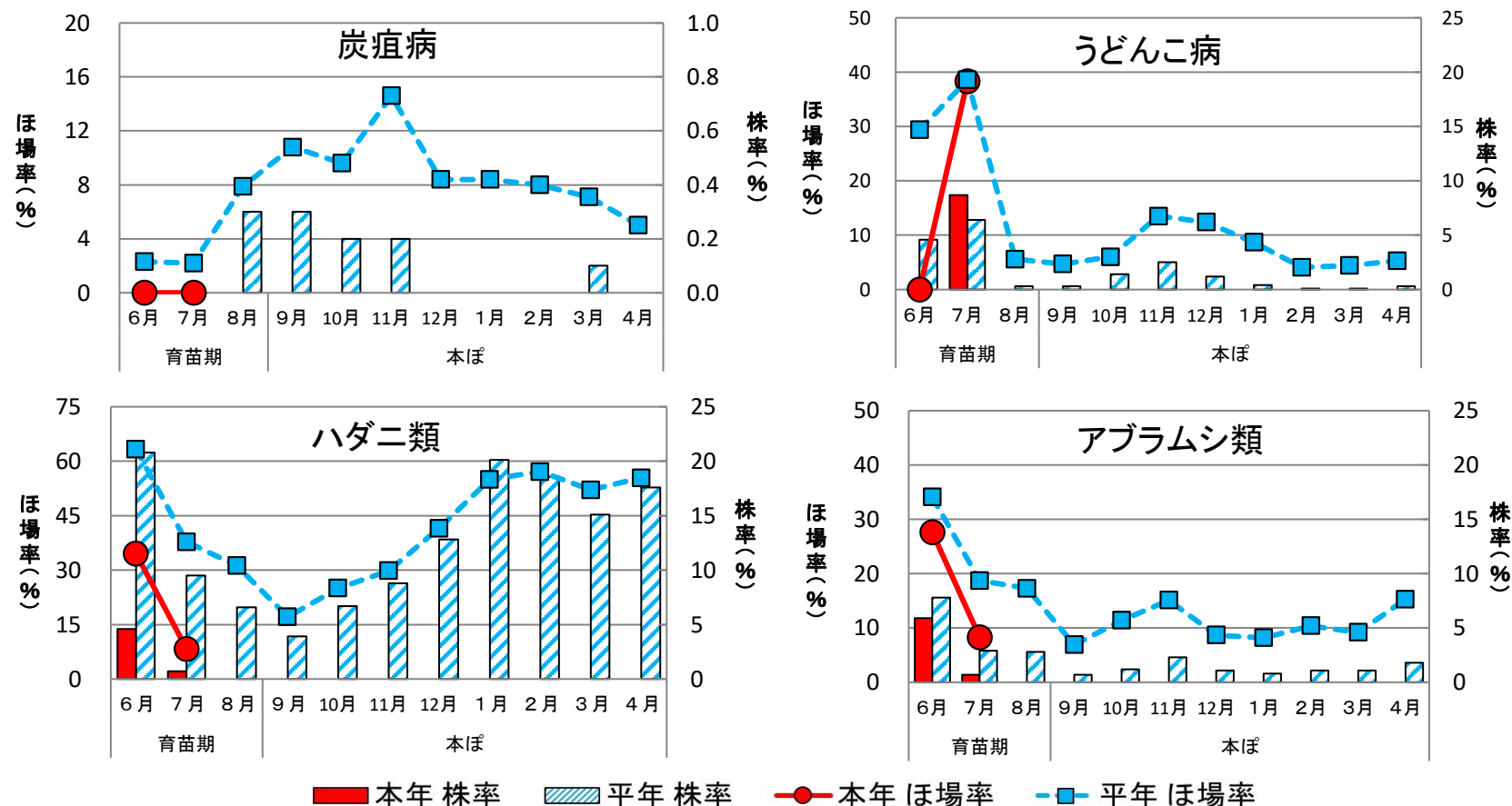


いちご病害虫情報第2号（7月）

令和3（2021）年7月16日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況（親株床・育苗）

- ・炭疽病の発生は少なく、うどんこ病の発生は平年並です。
- ・ハダニ類、アブラムシの発生はやや少ないです。



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 主な病害虫の発生予想と防除対策

1 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや多い
- (2) 対策
 - ・ 点滴チューブを用いるなど、水の跳ね返りが少ない方法でかん水を行う。
 - ・ また、ほ場内の排水を良くし、胞子の飛散による他株への伝染を防ぐ。
 - ・ 発病してからの防除は困難なので、予防を主体に薬剤散布を行う。
 - ・ 発病株は見つけ次第取り除き、ほ場外で処分し、速やかに治療効果のあるサンリット水和剤等を散布する。

2 うどんこ病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 対策
 - ・ 軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な施肥管理やかん水を行う。
 - ・ 予防を主体に薬剤散布を行う。

3 ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 対策
 - ・ ほ場をこまめに観察し、低密度のうちに防除を行う。
 - ・ 薬剤抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤や天敵製剤を積極的に活用する。
 - ・ 化学農薬を使用する場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
 - ・ 気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布すると効果が高い。
 - ・ 葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。

4 アブラムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 対策
 - ・ 発生初期から系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
 - ・ 雑草はアブラムシ類の増殖源になるので、ほ場内外を除草する。

■ 今月のトピックス 炭疽病について

- ・炭疽病はいちご栽培で最も警戒されている病害となっている。
- ・炭疽病菌は高温・多湿を好むため、梅雨明けの育苗中から発病が目立つようになる。葉上の斑点型病斑（図1）や葉柄等の黒色陥没病斑（図2）、青枯れ的に萎れた株（図3、図4）を見逃さないよう注意深く観察し、罹病した株は早期に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
- ・病斑上に形成された多量の胞子が雨やかん水の水滴の跳ね返りによって飛散し伝染する。さらに植物体の濡れ時間が長いと感染・発病が助長される。
- ・炭疽病の特徴的な症状として、クラウン内部にまで褐変が及ぶ（図5）。また、湿潤下に置くと特徴的な鮭肉色の孢子塊（分生子層）が形成される（図6）。



図1 葉上の斑点型病斑



図2 葉柄の黒色陥没病斑



図3 定植後に萎れた株



図4 萎凋して垂れ下がる(親株)

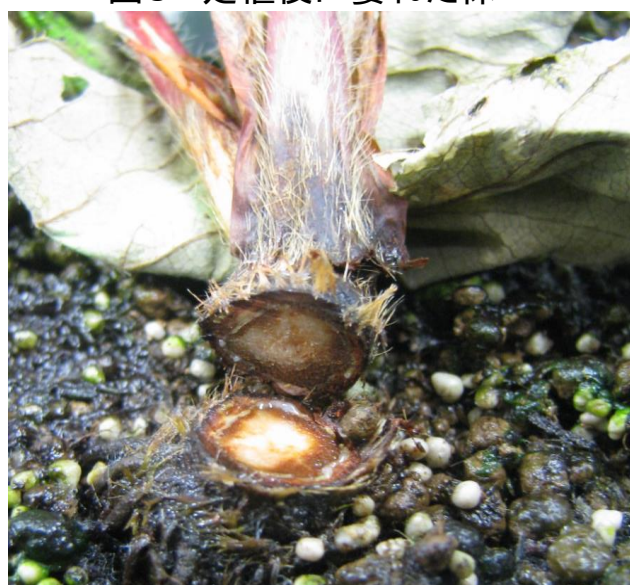


図5 褐変している萎凋株のクラウン断面



図6 湿潤下に保持した病斑
高温多湿下で病斑上に鮭肉色の粉状から粘塊状の孢子塊(分生子層)を形成する。

GAPの実践で安全・安心ないちご生産に取り組みましょう！